

東西文化交流の足跡を探し求めて (I)

——2002 年歳暮香港行

沈 国威

暮れの慌ただしい中、資料調査のため、1 年ぶりに香港を訪れることになった。

関西空港から僅か 3 時間ちょっとのフライトで香港空港に降り立った。ホテルに着くと、すぐ中国科学院自然科学研究所研究員の韓琦教授から電話が入った。韓琦氏は共同研究のために香港城市大学に滞在中で、調査について氏の協力を仰ぐ必要があり事前に連絡してあったからだ。

翌日、8 時半、韓琦氏と金鐘駅で落ち合って、バスで香港大学へ行った。香港大学では、中文系（歴史、哲学、言語、文学等の中国に関する諸分野を扱う学部）設立 75 周年の記念行事として、21 日～23 日の 3 日間で明清時代の経学、史学、文学、文字音韻学、思想文化をテーマに、「明清學術国際シンポジウム」が開かれている最中である。主に大陸から著名な研究者が 20 名前後招待され、総勢 100 名以上の参加者が集まっていた。私も飛び入りで参加した。陳萬成氏（香港大）：湯若望『主制群徴』與翻訳、韓琦氏：康熙時代宮廷的『易經』研究——耶蘇会士及其作用、馮錦榮氏（香港大）：南懷仁『窮理学』（1683）中的火砲彈道学知識、李葆嘉氏（浸会大）：明清西洋学者官話課本音系研究、張渭毅氏（北京大）：從威妥瑪『語言自邇集』看 19 世紀北京語音的特点などの発表は、私にとって特に興味深いものである。

発表の合間を縫って、シンポジウムの秘書長を務めた馮錦榮教授が時間を割いて香港大学図書館特蔵部を案内してくれた。特蔵部の別室にモリソンコレクションがあり、モリソンが集めたり、使用したりした図書が所蔵されている。またマイクロフィルム室に香港植民地支配、キリスト教布教などの近代史に関する膨大な資料が収蔵されている。近代東西文化交流史の研究者にとって資料の宝庫である。

24 日、香港浸会大学（Hong Kong Baptist University）を訪ねた。同大学歴史系の黄文江教授とは、1999 年 12 月ドイツ・ゲッティゲン大学で開催されたシンポジウムで会ったことがあり、案内をお願いしたところ、クリスマスの前日にも関わらず快く引き受けてくださった。事前にこちらの要望をメールで図書館館長助理の黄淑薇女史に伝えてあるので、図書館では山積みした資料の山が待っていた。

香港浸会大学は 1955 年に設立されたミッション系の大学で、1983 年から香港政府の助成を受ける公立校になってから大きく発展し、今日は学生数 5000 人規模の大学になったと黄教授が教えてくれた。大陸を含め、中国で唯一教会名を冠した大学であるという自負から、中国におけるキリスト教伝道史の研究に非常に熱心である。1996 年、「基督教在华発展史文献部」(Archives on the History of Christianity in China) が設立され、貴重図書が 2,300 冊、マイクロフィルムが 20,000 点所蔵されている。キリスト教中国布教史に関して、アジア随一の所蔵を誇っている。

英華書院について資料を調べる筆者に、司書の青年(学生のアパートか)から自分も英華書院の卒業生だと紹介され、英華書院はすぐ近くにあるとも教えてくれた。これが 2 日後の同書院訪問のきっかけとなった。

図書館で所蔵情况等について一通り調べた後、歴史系主任の周佳榮教授、同歴史系近代史研究センター副主任の林啓彦教授に紹介され、黄文江教授、韓琦教授も加わって懇談した。周佳榮教授、林啓彦教授はともに広島大学博士課程の出身で、東洋史、日中関係史を専攻されている。林教授はまた、さねとうけいしゅう氏の名著『中国人日本留学史』の中国語翻訳者としても知られている。下記は諸先生から賜った資料の一部である。

- 周佳榮：近代亞洲史上の英華書院(『明報』2002.12、94-95 頁)
- 周佳榮：『新民與復興 近代中国思想論』(亞洲學術文庫 11、香港教育図書公司 1999)
- 周佳榮：19 世紀香港書刊在日本的傳播(『歴史與文化』浸会大 2001 年第 2 巻 79~84 頁)
- 林啓彦・黄文江主編：『王韜與近代世界』(亞洲學術文庫 14、香港教育図書公司 2000)
- 黄文江：James Legge A Pioneer at Crossroads of East and West (Wong Man Kong, Hong Kong Educational Publishing Co.)
- 黄文江：英華書院(1843-1873)與中西文化交流的歷史意義(『アジアの諸問題——深澤秀男教授記念論文集』岩手大学アジア史研究室編 2000 年 23-39 頁)

話が弾み、あっという間に 1 時を過ぎた。午後からはクリスマス休暇で、隣室の女性職員、秘書たちは、パーティーを始めたらしく、賛美歌の歌声が聞こえてきた。

浸会大学を後にし、中文大学に金觀濤、劉青峰夫妻を訪ねた。現在、雑誌『二十一世紀』の編輯を担われている両氏は、近代思想の研究者として名を馳せている。目下、香港政府の研究助成を受け、東洋における近代的概念の成立について研究を進めている。特に最近、データベースの構築に情熱を注いでおり、計量的な手法を用い、清末民初の文献における概念の導入と受容について精力的に研究している。互いに研究の進展と計画について話しあった。いま『時務報』、『循環日報』の全文入力を行っているところだと教えてくれた。一般公開が待ち遠しい。

金觀濤教授のご自宅でご馳走になって、ホテルに帰ったのは日もとっぷり暮れた頃であった。駅では救世軍の聖歌隊が賛美歌を斉唱している。香港が開港し、賛美歌が歌えるように

なってから、160 年が経っている。近代東西の異文化交流における宣教師の役割とその遺産について、多方面、多角度からスポットを与え、研究しようとする機運が確実に高まりつつある。

25 日早朝、姚徳懷氏が訪ねてきた。香港中国語文学会の会長を務めている氏とは、雑誌『詞庫建設通訊』の時から交流を続けてきた。目下、サイト「華語橋」を開通し、英辞郎のようなインターネット辞書を作ろうとしている。ぜひ下記のサイトを訪れてほしいとのことであった。

<http://www.starhub.net.sg/~shcheong>

26 日、英華書院を訪ねることにした。浸会大学図書館特蔵部で会った青年、廖穎康氏から英華書院はいまも引き続き運営されていることを聞き、本当に驚いた。内田慶市氏との共著『近代啓蒙の足跡——東西文化交流と言語接触：智環啓蒙塾課初歩』（関西大学出版部 2002 年）を執筆した際、『智環啓蒙塾課初歩』の版元：英華書院についていろいろ調べたことがある。1843 年マラッカより香港に移転した当時は、香港島に位置したので、すでに最初の場所ではないが、それでもぜひこの目で「英華書院」を見たかった。

九龍塘駅から歩くこと 10 分で、豪邸が建ち並ぶ高級住宅地の一角に 4 階建ての建物の壁に「英華書院」とあるのを見つけた。正門の上には YING WA COLLEGE とあり、Anglo-Chinese College ではないので、不審に思ったが、正門そばの壁に大理石の銘板が取り付けられており、



英華書院遠景

YING WA COLLEGE / WAS ORIGINALLY FOUNDED IN MALACCA / BY THE REV. ROBERT MORRISON, D. D., / OF THE LONDON MISSIONARY SOCIETY / IN THE YEAR 1818. (は改行) との文言がある。やはりモリソンが創設し、レグが閉じたその英華書院であった。正門の壁に貼ってある生徒募集通知によれば、今の英華書院は全日制の男子英語中学校（日本の中高一貫校）で、中 1~5 学年（日本の中学校に相当）に、各 5 クラス、中 6、7 学年（日本の高校に相当）に各 3 クラスで、1,200 人が在籍している。応募資格は、英語、中国語、数学の 3 科目は、評点 B（81-90 点）以上が必要とのことである。進学校らしい。道路の向こう側や隣にこれもまたミッション系と思われる中学校、小学校、幼稚園が軒を連ねている。

すでにクリスマス・新年の休みに入っており、キャンパスは、静まりかえっていた。ドア越しに覗いたら微かに人影がいたので、閉まっている門を叩いた。男子生徒が 2、3 人走ってきた。演劇部の活動のために登校しているようだ。ちょっと中をみたいと要望を言うと今度は、劉という若い女性の先生が見え、生徒たちに案内をさせた。校舎はかなり古く、中庭はバスケットコートになって、手狭に感じた。そのために来年の 9 月に西九龍の新校舎に移転することになっているという。



英華書院正門

1998 年は、英華書院創立 180 周年に当たる年であった。大々的に記念行事が行われ、『古樹英華——英華書院校史』という本も出版された。「古樹英華」とは、なかなか味わい深いネーミングである。あいにく休日のため、すぐ購入ができなかったが、劉先生に立派な 180 周年記念冊をいただいた。表紙にモリソンの写真と同書院から出版された

『遐邇貫珍』の書影が飾られている。筆者はいま、松浦章、内田慶市の両氏と共同で『遐邇貫珍』に関する研究書を準備しており、英華書院の印刷部門は 1872 年に中華印務局に譲渡され、存在しなくなったが、英華書院の庭に立つと、感慨深いものがあった。劉先生は、販売担当の係は、翌 27 日の 9 時から出校すると教えてくれたので、絶対手に入れようと出直すことにした。

27 日、朝から雨と強い風。午後の飛行機なので、もう一度英華書院へ行って、『古樹英華』を買い求めた。

「遠源、遷港、重興、転折、得力、大戦前後、戦後初期的英華、従六十年代至今、結語」の 9 章から成り、英語と中国語の対訳になっている 360 頁のものである。貴重な写真が数多く収められ、資料価値が高い。新校舎に「校史室」も設けられるとのことで、ぜひもう一度訪れたい。

飛行機は、降りしきる雨の中を飛び立った。香港は、黄文江氏の新著にあるように、Crossroads of East and West の交差点に位置する都市で、東西文化交流の研究において、まさに原点である。

この度の資料調査では、韓琦教授、馮錦榮教授、黄文江教授をはじめ多くの方々の協力を得た。心から感謝する次第である。